

# 保健体育教員を目指す学生に必要な泳力と指導能力について

## — 中部学院大学における 5 年間の授業展開から —

Study on Abilities for Swimming and Coaching necessary for Students  
who head for Teachers of Health and Physical Education  
~Result from Class Activities through Five Years in Chubu Gakuin University~

水野かがみ\*  
Kagami MIZUNO

抄録：2009年4月に中部学院大学人間福祉学部健康福祉学科に健康スポーツコースが設置されて以来、2014年3月の学科廃止に至るまで中学・高校保健体育の教員免許が取得できた。カリキュラム上には多くの専門科目が配置されたが、なかでもプールの設備がない本学における水泳の授業展開についての実践報告は意義があると考えられる。本学の受講生のもともとの水泳能力及び水泳経験は千差万別であったが、半期の授業を通して各々泳力は向上し自信もつき授業評価も高かった。しかし、本来の保健体育教員として身につけておくべき指導能力については充分とは言えない。指導能力を身につけるための実践的な科目設定や各自の学習時間の確保が必要である。

キーワード：水泳、保健体育教員、指導方法、学習指導要領

### 1. はじめに

中部学院大学人間福祉学部健康福祉学科には、2009年度に健康・スポーツコースが新設され、中学・高校の保健体育教員免許の開設が文部科学省に認可されたが、2014年3月で学科が廃止された。この間、体育系の学部ではないとはいえ、最低限の専門科目が配置され、実技科目も可能な種目が展開された。その中でも、プール設備のない本学において『水泳』の授業展開は担当者として他の実技種目以上に容易ではなく、学科が2014年3月廃止に至るまでの5年間、手探り状態での展開となった。しかし、中学・高校保健体育教員養成という責務を担っている以上は、制限のある中で、効率よくかつ効果的に授業を展開していかなければならなかった。本科目の授業計画（シラバス）は表1に示した。半期科目であること、小・中・高における学びを踏まえたうえで、保健体育教員として備えておくべき技術や技能を習得できるように考慮し、計画した<sup>8,9,10,11)</sup>。本学にはプールの設備がないため近隣の市民プールを借用し、毎週1回片道約30分かけてバスで移動してプールでの授業を実施した。大学から市民プールまでの移動は毎回教員1名が受講生を引率し、移動中の安全確保のため、バスの乗り遅れや現地に個人で移動することは一切認めなかった。また毎回、往きのバスの中では問診票を用いて授業前の体調のチェックをおこない、参加の有無を自分で判断させて提出させた。さらに授業終了後および帰りのバスの

中で体調をチェックさせ、さらに授業評価および感想・反省を記載させた上で提出させるなど、バスでの移動時間を有効に活用した。

本稿は、この5年間の水泳の授業展開についてまとめ、課題点を見出し、今後の水泳の指導法に役立てることを目的とした。

表1 水泳実技 シラバス 2014年度版

2014年度 スポーツ実技D(水泳)		担当者 水野かがみ	
<科目>人間福祉学部健康福祉学科 専門科目 半期(前期:16回)1単位 <関連資格・免許> 中学・高校保健体育教員免許、健康運動指導士、 スポーツプログラマー、ジュニアスポーツ指導員			
<講義概要> 4泳法(クロール、背泳ぎ、平泳ぎ、バタフライ)、横泳ぎ(水府流太田派)、立ち泳ぎ(踏み足、巻き足)について学習する。さらにそれぞれの泳ぎ方の指導法及び水泳中に起こりやすい事故に対する対処法について理解する。			
<授業計画>			
日	程	場 所	内 容
1	4月11日	教室	ガイダンス
2	4月18日	プール	水馴れ、泳力判定、班分け
3	4月25日	プール	各種泳法
4	5月2日	プール	各種泳法
5	5月9日	プール	各種泳法
6	5月16日	教室	理論
7	5月23日	教室	理論テスト
8	5月30日	プール	各種泳法
9	6月6日	プール	各種泳法
10	6月13日	プール	各種泳法
11	6月20日	プール	各種泳法
12	6月27日	プール	各種泳法
13	7月4日	プール	各種泳法
14	7月11日	プール	総合練習
15	7月18日	屋外プール	水泳における救急法、救助法
16	7月25日	プール	実技テスト(評価とまとめ)
<参考文献>水泳指導教本(大修館書店)、赤十字水上安全法講習教本(日本赤十字社) <評価方法>出席状況、受講態度、技術評価、理論評価により総合的に評価する			
<受講上の注意>実技は各務原市民プールで行うため、履修者全員で毎週大学よりバスで移動する。13:00発のため、必ず昼食をすませ、必要なもの(水着・帽子、ゴーグル、タオル、筆記具、ロッカー用の100円玉、その他)だけを持参してバス乗り場に集合すること。この時点で間に合わなかった者は欠席となるので注意すること。また、往復の移動のバスの中で健康チェック及び学習成果のチェックを行うため筆記用具は必ず持参する。見学、欠席についてはレポート提出をする。			

\* 人間福祉学部人間福祉学科

## 方 法

### 1. 調査協力者

5力年の水泳受講者の男子98名、女子42名の計140名が調査に協力した(表2)。

表2 水泳受講者数(5年分)

年 度	男子	女子	合計
2010年	16	7	23
2011年	19	10	29
2012年	23	9	32
2013年	25	5	30
2014年	15	11	26
5力年合計	98	42	140

### 2. 調査期間

調査は2009年4月から2014年3月にわたり実施した。

### 3. 調査の種類

調査は以下の3種類とした。①表3に示すような受講生の性格特徴、運動・スポーツに対する態度などに関する調査、②水泳経験、泳力、指導力などに関する調査

③学生の授業評価では表4で示すような授業時間内の受講者の行動や態度などに関する調査<sup>7)</sup>

表3 受講者の特徴について

質 問 項 目	%		
	はい	どちらともいえない	いいえ
1. あなたは身体を動かすことが好きですか。	93.0	6.0	1.0
2. あなたは夢中になれるスポーツがありますか。	95.7	3.5	0.8
3. あなたは小・中・高の体育の授業は好きでしたか。	94.8	3.5	1.7
4. 体育の成績評価は全般に良かったですか。	80.0	16.5	3.5
5. あなたは運動能力に自信がありますか。	42.6	44.3	13.1
6. あなたは体力に自信がありますか。	44.3	37.4	18.3
7. あなたは健康だと思っていますか。	75.7	19.1	5.2
8. あなたはスポーツを見ることが好きですか。	93.9	3.5	2.6
9. 赤ちゃんを見てかわいいと思いますか。	92.2	7.0	0.8
10. あなたは幼児と遊ぶことができますか。	83.5	14.8	1.7
11. あなたは子どもが好きですか。	88.7	9.6	1.7
12. あなたは小学生と遊ぶことができますか。	82.6	15.7	1.7
13. あなたはお年寄りとお話ができますか。	78.3	18.3	3.4
14. あなたは初対面の人と平気で話ができますか。	33.1	45.2	21.7
15. あなたは明るい性格だと思いますか。	53.0	37.4	9.6
16. あなたは忍耐力がありますか。	53.1	39.1	7.8
17. あなたは努力家ですか。	35.7	48.7	15.6
18. あなたは運動やスポーツを教えたことがありますか。	80.0	13.0	7.0
19. あなたは機会があれば教えたいと思いますか。	86.1	13.0	0.9
20. あなたは運動やスポーツの指導者になりたいと思いますか。	86.1	12.2	1.7
21. あなたは学校の体育の先生になりたいですか。	73.9	21.7	4.4
22. あなたはもっとうまくなりたいと思っている運動技術がありますか。	91.3	7.8	0.9
23. あなたは運動・スポーツに関する本は読む方ですか。	47.8	33.9	18.3
24. あなたは運動・スポーツに関するビデオやDVDは見る方ですか。	44.3	33.1	22.6

表4 学習評価項目

1. 精一杯全力を尽くして運動することができましたか
2. 今日学習したことは、自分たちにあっていましたか。
3. もっと長くやりたかったですか。
4. 深く心に残ること感動することはありましたか。
5. 運動の仕方を考えて練習しましたか。
6. いままでできなかったことが、できるようになりましたか。
7. 「あっそうか」「あっわかった」とおもったことがありましたか。
8. 学習の約束をきちんと守ることができましたか。
9. 運動のルールを守って学習できましたか。
10. 自分から進んで学習することができましたか。
11. 自分のめあてを持って学習できましたか。
12. 仲間に教えてあげたり、教えられたことはありましたか。
13. 仲間と協力して仲良くできましたか
14. 思わず拍手をしたり、「ワーッと」歓声をあげたことがありましたか。

## 4. 調査の実施

①保健体育教員免許取得のための必修科目である「スポーツ・運動方法論」の授業時間において実施した。②は「水泳」の授業時間の初回授業開始前と最終回授業終了後に実施した。③はプールでの授業終了後毎回実施した。以上の3種類の調査はいずれも用意された質問に対して「はい」、「どちらともいえない」、「いいえ」の3段階で自己評価させた。

## 5. 調査結果の処理

③の調査では、「はい」は1点、「どちらともいえない」は2点、「いいえ」は3点として整理した。他の調査では、3段階別に該当者を分類し、その結果を割合で示した。

## 結 果

### 1. 受講生の特徴について

受講生の特徴に関する調査では、1)運動能力や健康度、2)スポーツに関する興味や関心度、3)性格特徴、4)他者との関わり、5)指導経験・指導意欲の5点について調べた。表3には、調査①の各調査項目別に調査協力者140名を3段階別に分類し、百分率で示した。

#### 1) 運動能力および健康度

表3によれば、身体を動かすことが好きな者は93.0%、夢中になれるスポーツがある者が95.7%、スポーツを見ることが好きな者が93.9%であった。小学校、中学校、高校時に受けた体育の授業が好きであった者は94.8%、体育の成績評価も良かったと回答した者が80.0%と高い割合であった。しかし、運動能力に自信があるかという質問に対して、「ある」と回答した者は42.6%に対して、「どちらともいえない・ない」が57.4%、また体力に自信があるかという質問に対して、「ある」と回答した者が44.3%で「どちらともいえない・ない」が55.7%であった。さらに健康だと思っているかどうかの質問に対して、「健康である」と回答した者が75.7%、「どちらともいえない」が19.1%、「健康でない」が5.2%であった。

#### 2) スポーツに関する興味や関心度

自分自身のスポーツの取り組む姿勢に関して、「さらにうまくなりたいと思っている運動技術がありますか?」という質問に対して、「ある」と回答した者が91.3%、「どちらともいえない・ない」が8.7%であった。「運動やスポーツに関する本は読むほうですか?」という質問では、「読む」と回答したものが47.8%、「どちらともいえない」が33.9%、「読まない」が18.3%、さらに

「運動やスポーツに関するビデオやDVDは活用しますか?」という質問では、「活用する」と回答した者が44.3%、「どちらともいえない」が33.1%、「活用しない」が22.6%であった。

### 3) 性格特徴

「明るい性格だと思いますか?」という質問に対して、「思う」と回答した者が53.0%、「どちらともいえない」が37.4%、「思わない」が9.6%、また「忍耐力がありますか?」という質問に対して、「ある」と回答した者が53.1%、「どちらともいえない」が39.1%、「ない」が7.8%、「努力家だと思いますか?」という質問に対して、「思う」と回答した者が35.7%、「どちらともいえない」が48.7%、「思わない」が15.6%であった。

### 4) 他者との関わり

対人関係についての質問では、赤ちゃんをみてかわいいと思う者が92.2%、子どもが好きな者が88.7%と高い割合を示した。幼児と遊ぶことができるかという質問に対して、「遊べる」と回答した者は83.5%、「どちらともいえない」および「いいえ」と回答した者が16.5%であった。また、小学生と遊ぶことができるかどうかの質問については「できる」と回答した者が82.6%、「どちらともいえない・できない」と回答した者が17.4%であった。「お年寄りとお話ができますか?」という質問に対しては、「できる」と回答した者が78.3%、「どちらともいえない」および「できない」と回答した者が21.7%であった。さらに「初対面の人とも話することは平気な方ですか?」という質問に対しては、「はい」と回答した者が33.1%、「どちらともいえない」が45.2%、「いいえ」が21.7%であった。

### 5) 指導経験・指導意欲

表3によれば、運動やスポーツの指導経験に関する質問では、「ある」と回答した者が80.0%、「どちらともいえない」および「いいえ」と回答した者が20.0%であった。また「機会があれば教えたいと思いますか?」という質問に対して、「教えたいと思う」86.1%、「どちらともいえない」および「教えたいと思わない」が13.9%であった。さらに「運動やスポーツの指導者になりたいですか?」という質問に対しては、「なりたと思う」と回答した者が86.1%、「どちらともいえない」および「なりたと思わない」が13.9%で、「学校の体育の先生になりたいと思いますか?」という質問に対して、「なりたと思う」が73.9%、「どちらともいえない」および「なりたと思わない」が26.1%であった。

## 2. 水泳の授業展開について

### 1) 授業内容と指導体制

半期の授業内容(シラバス)を表1に示した。実技

種目であるため、本来ガイダンス以外はプールにおいて展開することが望ましいが、借用している施設側の都合等もあり、プールでの実施回数は毎年平均して12~13回は確保出来るようにした。不足分の時間数は本学において講義(水泳理論)をおこなった。水泳の技術(主に4泳法)習得のための練習<sup>1,2,4)</sup>は25M屋内プール4コースを活用して行い、立ち泳ぎと救助法の練習<sup>3,5,6)</sup>は、50M屋外プールを活用して展開した。指導体制は、担当教員と現場の有資格者の指導スタッフ2名で行った。1回の指導の流れとして、担当教員が毎回時案を作成し事前に指導スタッフにメールで送り把握してもらった。当日は担当教員が最初に全体に向けて本時の内容説明と模範を示し、その後レベル別に2つの班にわかれ、指導スタッフのもとで練習をすすめた。授業の終わりには全体が集合したところで指導スタッフからの感想と助言を述べてもらい挨拶をして終了した。その後迎えるバスがくるまでの時間は各自フリータイムとして活用できるようにし、練習をさせる。ここでは担当教員が残って個別指導が出来る体制をとった。なお、授業中の安全確保のための監視体制および水質・水温・室温等の環境<sup>12)</sup>については、施設側に一任したが、問題はなかった。

### 2) 水泳経験と泳力

受講生の水泳経験について、学校体育における水泳の授業の有無(図1)から、小学校時は100%、中学校時は80%、高校時は20%の者が「授業があった」と回答した。受講前の泳力(自己申告)については「全く泳げない」と回答した者が3.6%、「25M泳ぐ自信がない」が7.1%、「25M~50M未満」が30%、「50M以上100M未満」が36.4%、「泳力には自信がある」が22.9%であった(図2)。水泳の指導法に関心があると回答した者は6.4%と低い割合であった。

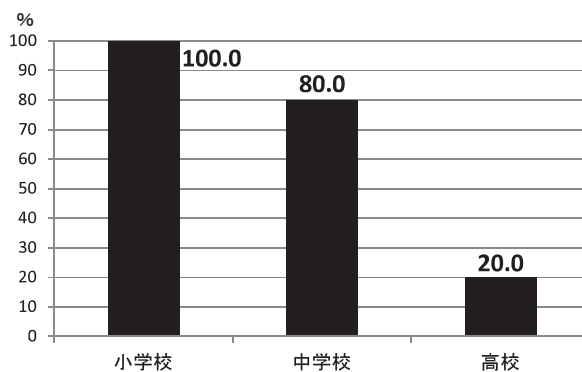


図1 受講者の水泳経験について (%)

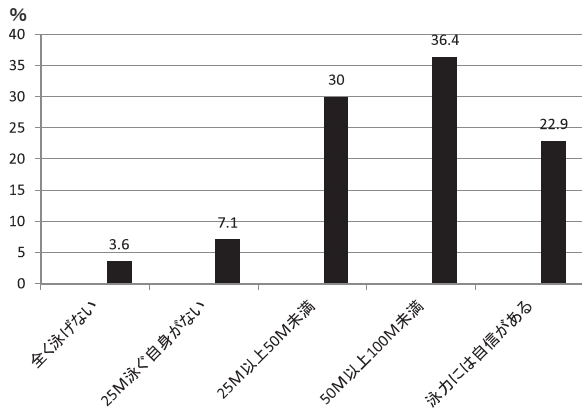


図2 受講者の泳力について (自己申告) (%)

3. 受講生の授業評価について

授業評価については、表5に示した。5カ年の受講生による授業評価の平均値が「学習意欲」が3.6、「技能・認識」が4.5、「学習の規律」が4.2、「協力」が3.9で、どの評価項目においても高い評価を示した。

表5 学習評価項目の分析結果

項目	楽しさ (学習意欲)	達成 (技能や認識)	学び方 (学習の規律)	かかわり (協力)
2010	3.8	4.4	4.2	4.0
2011	3.5	4.5	4.1	3.8
2012	3.5	4.2	4.1	4.0
2013	3.9	5.2	4.5	4.4
2014	3.5	4.3	4.2	3.6
5カ年平均	3.6	4.5	4.2	3.9

最終授業終了後の調査では、実技テストの課題である「100M泳ぎきれたか」という質問に対して、97.6%の者が「はい」と回答し、「どちらともいえない」および「いいえ」が2.4%であった(表6)。また、この課題設定が適切であるかという質問に対して、「適切である」と回答した者が88.6%、「どちらともいえない」および「不適切である」と回答した者が11.4%であった(表7)。受講前より泳力がついたかという質問に対して、「ついた」と回答した者が97.4%、逆に「どちらともいえない」および「いいえ」と回答した者が2.6%であった(表8)。また受講前より自信がついたかという質問に対して、「自信がついた」と回答した者が89.9%、「どちらともいえない」および「いいえ」が10.1%であった(表9)。中学生や高校生に水泳指導ができるかどうかについては、「できる」と回答した者が30.4%、「どちらともいえない」および「いいえ」が69.6%であった(表10)。受講後自信のある泳法についての質問では、「クロール」が40.5%、次いで「平泳ぎ」が38.0%、「背泳ぎ」19.0%、最も低い割合であったのは「バタフライ」の2.5%であった(図3)。逆に最も自信のない泳法は「バタフライ」が59.5%、次に「背泳ぎ」20.3%、「平泳ぎ」13.9%、「クロール」6.3%の順であった(図4)。

表6 100M(課題)は泳ぐことができたか

項目	はい	いいえ	どちらともいえない
%	97.6	1.2	1.2

表7 評価設定は適切であったか

項目	適切	不適切	どちらともいえない
%	88.6	3.8	7.6

表8 受講前より泳力がついたか

項目	はい	いいえ	どちらともいえない
%	97.4	1.3	1.3

表9 受講前より自信がついたか

項目	はい	いいえ	どちらともいえない
%	89.9	3.8	6.3

表10 中学生や高校生に指導ができるか

項目	はい	いいえ	どちらともいえない
%	30.4	19.0	50.6

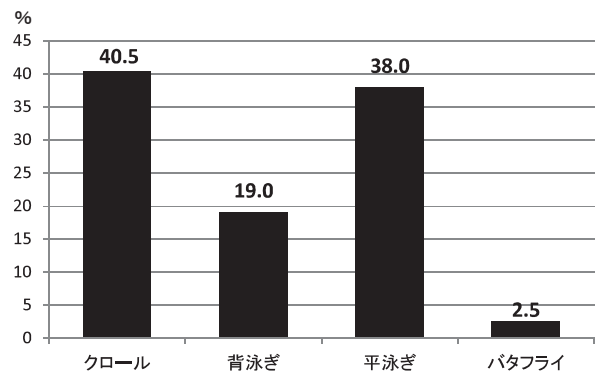


図3 受講後最も自信のある泳法は? (%)

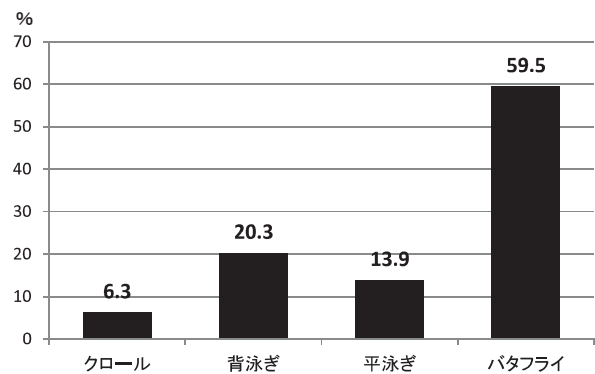


図4 受講後最も自信のない泳法は? (%)

また、授業内容において最も難しいと感じた項目について、割合の多かった順に「バタフライの脚の動作」が(53.2%)、「各種ターン」が(49.4%)、「バタフライの脚の動作」が(48.1%)、「立ち泳ぎ」が(44.3%)、「バタフライの呼吸動作」が(43.0%)であった(図5)。環境面については、プールまでのバス移動について「適切である」とした者が79.7%で、「どちらともいえない」は11.4%、「不適切である」と回答した者が8.9%であ



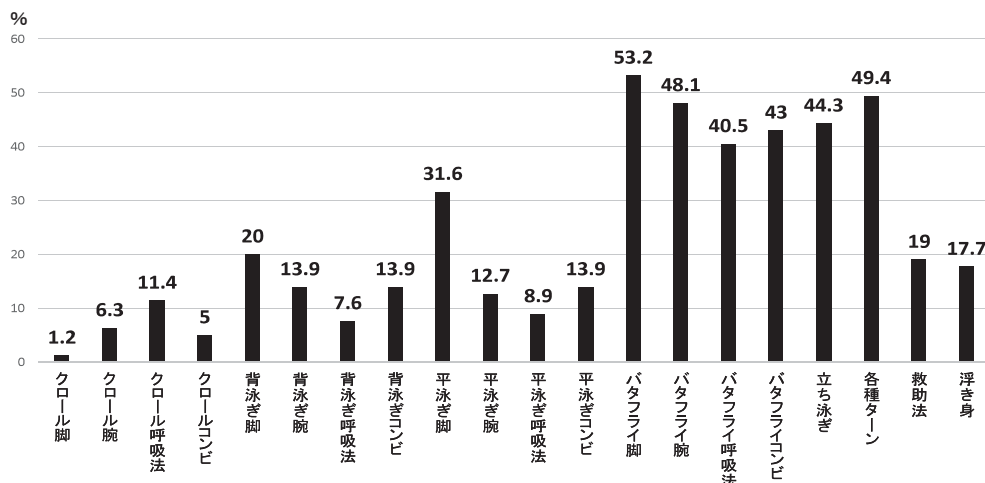


図5 授業内容において最も難しいと感じた項目はなにか (複数回答) (%)

た (表 11)。さらにプールの環境 (水深・水温・安全面等) についても「適切である」とした者は 94.9%、「不適切である」は 5.1%であった (表 12)。泳ぐ時間については「適切であった」が 95%、「長い」とした者が 2.5%、同様に「短い」とした者も 2.5%であった (表 14)。そして指導スタッフについては「適切であった」とした者は 98.7%、「適切でない」とした者は 1.3%であった (表 13)。

表 11 プールまでのバス移動について

項目	適切	不適切	どちらともいえない
%	79.7	8.9	11.4

表 12 プールの環境 (水深、水温、安全面) について

項目	適切	不適切
%	94.9	5.1

表 13 指導スタッフは適切であったか

項目	はい	いいえ
%	98.7	1.3

表 14 泳ぐ時間はどうだったか

項目	適切	長い	短い
%	95.0	2.5	2.5

## 考 察

### 1. 本学の保健体育教員を目指す学生の特徴

2009年4月健康福祉学科に健康スポーツコースが設置されてから2014年3月学科廃止に至るまでの間に、中学校・高校の保健体育の教員免許取得を希望した学生全体の特徴について調べた。その結果、当然なことながらスポーツや運動をして身体を動かすことが好きであり、観るのも好きな者が多かった。また、大学入学以前の「体育」の科目が好きで、成績評価も良かった者の割合が高かったが、現在の自分自身の健康や体力には自信のない者も多かった。対人関係では、自分たちより小さい

者、赤ちゃんや子どもに対しては、可愛いとっていて好きな者が多かった。また一緒に遊んであげられるようであった。しかし高齢者に対してはコミュニケーションをとれる割合がそれと比較すると低い割合であった。また、初対面の人と接することに関してはどちらかといえば戸惑っている者の割合の方が高かった。日頃彼らと接し、学生生活の様子をみても感じることであるが、本学の学生は人に対して自ら積極的に関わっていくことが苦手な者が多いように思われる。同じクラブ活動に所属する仲間とは一緒にいることが多く、行動も共にしているようだがそれ以外の人に関わることに消極的なようである。性格について調査結果からは、明るいと自覚している者は半数程度で、忍耐力があると思っている者も約半数であった。努力家であるかどうかの問いには、約6割の者が否定的な回答をしており危惧するところである。さらに現在取り組んでいるスポーツについて、より向上させたいと思っている技術がありながら、それに関する本や視覚的教材を有効に活用している者の割合が低く、関心が薄いという結果を示した。日常的に身体的トレーニングを実施することや、クラブの練習参加には重きを置いているようにみえる。実践をこなすことは得意だが、理論となると苦手意識があるようで、教える立場になるには理論も大切であることを理解させなければならない。

### 2. 指導者を目指す学生に求められる指導能力

受講する学生で指導を経験したことのある者は8割強と多く、機会があれば教えたいと思っている者の割合も高かった。このことは教員を志す学生としては望ましいことではあるが、指導経験といっても、20歳前後の学生である。その内容は母校に出向いて後輩たちにアドバイスをしたとか、監督や顧問を通して依頼された単発的なプログラムに、所属しているクラブの仲間と共に参加したとか、あるいは外部から大学に依頼されたボランティア活動へ参加したというものが多く、継続的に長期間にわたって指導したことは少ないようであった。また、

運動やスポーツの指導者になりたいと思っている者が86.1%もいるのに対し、学校の体育教員志望となると73.9%と低くなったことは、必ずしも体育の教員にはこだわっておらず、それ以外の、例えば各種のスポーツインストラクターやコーチ、監督などのような指導的立場に携わればよいだろうという程度の考えなのかもしれない。教員免許取得を目指していながらも、自信を持てずに半ばあきらめている様子も伺える。いずれにしても教員を含めたスポーツ指導者を目指しているのであれば、実技の習得だけでなく、指導力を身につけることも重要である。指導力というものは実践の積み重ねで身につくものである。意欲的な学生のみならず、受講する学生すべてに自信をもたせるためには、カリキュラムはもちろんのこと、学内外におけるスポーツ指導の機会を多く設定し、積極的に参加できるように促していくことが必要である。

### 3. 保健体育教員に求められる水泳指導能力

受講生の水泳経験について、体育の授業で水泳の実技は小学校のすべてで行われていたが、中学校では8割であったことから、義務教育においてはおおかた実施されていたと考えてよい。しかし、高校においては2割程度しか授業として展開されていなかったという結果は予想外であった。もともとプールの設備のない高校や、最近では大学のように前期・後期の2期制の高校においては、体育の授業で実施される種目も選択制になっており、希望者が少ない場合には実施されないということもあるようである。特に水泳は陸上で展開できる種目とは異なり、安全面に対する配慮やプールの管理体制がより一層必要になることから、体育教員にも敬遠されがちな種目のようである。また、生徒の方も水着を着用することや、髪の毛の始末に手間がかかるという理由から嫌われる傾向にある。これらのことから水泳は無理をしてまでやらなくてもよいのではないかという風潮になり、実施されないことが多いのではないだろうか。また泳力について自己申告させた結果、50M以上～100M未満泳げるとした者と泳ぐことに自信がある者を合わせると約6割程度であったが、逆に「まったく泳げない」という学生がいたことは意外であった。実際にプールでの初回授業において、泳力のレベル別に班分けをするために泳力判定を実施した。その際、顔を水につけられない者はいなかったが、数メートルで立ってしまう、つまり呼吸動作ができていない者や、泳ぎをすっかり忘れてしまっているような者もいた。また学生の中には、川や海でしか泳いだことがないので、正確に自分が何メートル泳げるのか把握していないという者もいた。このように水泳経験や泳力が千差万別の集団を一定の泳力レベルまでに到達させることは容易ではなかった。学生の授業評価の結果から、半期の授業を終えて各々の泳力も向上し自信もついたことで概ね高い評価が得られたと思われるが、

教員を目指す上で最も身につけなければならない指導力については十分でなかったといえる。半期という短い期間では限界がある。せめて通年もしくは指導方法は別科目として設けて実践的な内容を展開した方がよいと思われる。また、泳法(泳ぎ方)を学ぶことも大切であるが、水の事故から自分の身を守ることや、プールだけでなく海や川などさまざまな遊泳場における安全な水泳指導法についても多くの学習が必要であり、野外における経験も大切である。こうした実践的な教育を数多く実施し、学生たちに体験させることは大変意義あることで、机上の学習では得られない重要な成果が期待できる。

### 4. 保健体育の教員免許の開設認可について

水泳指導に限らず、保健体育の教員はすべての実技指導において実践的な教育を率先してやれることが求められる。そのために保健体育の教員免許が取得できる大学のカリキュラムはそれらのことが反映されたものでなければならない。本学人間福祉学部認可された時期は、全国的にも体育系以外の大学において体育・スポーツ系の学科やコースが多く認可された時期のようで、設置条件が緩かったのではないかと思われる。しかしここ数年では体育・スポーツ系の学科やコースの認可が以前より厳しくなり、少子化・大学全入の時代といったことも伴って、文部科学省の今後の方針として、保健体育教員は教育系および体育系の大学または学部においてのみ養成すればよいといった傾向が伺える。確かにそのことは考え方としては正しいと思うが、保健体育教員を目指すいまでも、これまで継続してきたスポーツ活動を大学でもやりたいと純粋に思っている人や、スポーツで得た実績を武器にして大学では他領域を学びたいと思っている人たちは決して少なくないと思われる。本学の場合は体育系の大学レベルの施設・設備環境が整わないとはいえ、福祉系の学部でありながら保健体育の教員免許の開設が認可され、曲がりなりにもスポーツで学生たちを集めることができていた。彼らに「保健体育の教員免許」という付加価値をつけて卒業させることはとても大きなメリットであったと思われるが、これからという時にあまりにもあつげなく学科廃止になってしまったことは惜しまれる。

### おわりに

5年間にわたり、プール設備のない環境条件の中で、事故ひとつなく安全に水泳の授業展開ができ、終わることができたことは、予想以上に真面目な姿勢で取り組んでくれた学生達および借用先のプールの管理者、指導スタッフ、バスの運転手さんなど、多くの方々の支えがあったことである。改めて感謝の意を述べたい。5年という月日を経て、ようやく集団における水泳指導のこつや指導方法の工夫について考える楽しさを感じ始め、何よ

り保健体育の教員を養成しているという責務を抱えながらも私自身がやりがいを感じていたことは確かである。学科廃止は本当に残念極まりないことで、自分の無力さにも腹立たしい思いである。とはいえ、大学保健体育教員としての私自身の指導実践能力の向上という視点では得たものは大きいと考える。今回の実践を今後の教育にも役立てていきたい。

## 文 献

- 1)日本水泳連盟編：水泳指導教本. 大修館書店, 2009
- 2)オーストラリア水泳連盟編：ジュニア水泳指導教本. 大修館書店, 2007
- 3)日本水泳連盟編：安全水泳. 大修館書店, 2007
- 4)鶴峰 治 他：新水泳指導論. 不昧堂出版, 1990
- 5)日本赤十字社：赤十字水上安全法講習会教本. 日本赤十字社, 2008
- 6)日本赤十字社：赤十字救急法講習会教本. 日本赤十字社, 2008
- 7)全日本スキー連盟：楽しいスキー教室. スキージャーナル株式会社, 1996
- 8)文部科学省：中学校学習指導要領. P89-97, 2008
- 9)文部科学省：高等学校学習指導要領. P90-97,2009
- 10)文部科学省：中学校学習指導要領解説. P70-82,2008
- 11)高等学校保健体育授業改善研究会編：高等学校新学習指導要領の展開. P83-92, 2013
- 12)木庭修一 他：水泳の段階的指導法と安全管理. ぎょうせい, 1982

## Study on Abilities for Swimming and Coaching necessary for Students who head for Teachers of Health and Physical Education

～ Results from Class Activities through Five Years in Chubu Gakuin University ～

Kagami MIZUNO

Abstract : From the establishment of Health Sports Course in 2009 to the abolition of the course in 2014 in Faculty of Human Well-Being Department of Health Welfare, Chubu Gakuin University, the Education Course had been set up for students who head for teachers of health and physical education in junior high school and high school. Many specialized subjects were prepared in the curriculum, practical report on development of swimming lesson in our university which has no swimming pool equipment might have a big significance. Though abilities and experiences of swimming of the students were multifarious at the beginning of the lesson, swimming abilities and degrees of confidence of the students improved through the lesson in a half year, and higher evaluation of the lesson was revealed. However, we are awkward to say that the students have developed sufficient coaching abilities necessary for teachers of health and physical education. Establishment of more practical subjects and ensuring of enough time for studies would be necessary to acquire better coaching abilities of the students.

Keywords : swimming, teachers of health and physical education, guiding methods , a course of study